

# 摂理脱退半年の手記

摂理脱退者 YANTA

## 目次

プロローグ : Prologue.....	2
内から見る、外から見る : Look from inside from outside.....	4
自分とよく似た他者 : Others like myself.....	8
無知の知と唯一絶対価値観 : Knowledge of ignorance, Very best sense of value.....	12
一色塗りの世界と平和な世界 : Monochrome world, Peaceful world.....	17
問題の無い会社 : No problem company.....	20
注文の多い料理店 : Many orders restaurant.....	26
種と土壌と実 : Seed, Soil, and Fruit.....	31
エピローグ : Epilogue.....	34

## プロローグ : Prologue

私が摂理を離れるようになってから 半年以上が経ちました。この半年の間に知り、学び、体験し、考えたことをもとに、今の自分の考えを形にしたいと思います。私自身、日々変化していると思いますので、この文章は、写真のように、ある瞬間の私の思考の断片のようなものになるでしょう。

この文章は、今なお摂理で活動しているメンバーの方たちへのメッセージとして書きたいと思います。本文に入る前に、私の身上を明らかにしておこうと思います。

私は2001年に関西圏にある大学に入学し、まもなく既に摂理のメンバーであった知人の紹介により、その大学にある摂理の伝道部署としての勉強会サークルに参加するようになりました。もちろんその時点では、その知人やサークルが摂理と関係があることは知るよしもなかったわけですが。そして、同年秋のヨーロッパへの家族旅行をきっかけに、サークルの先輩メンバーから聖書を薦められ、バイブルスタディーを学ぶようになりました。翌2002年3月からサービスに出るようになり、摂理のメンバーとなったわけです。

摂理在籍中は、関西摂理全体のコーラス部署「コール芽音」や、教会の聖歌隊、教会の伝道部署としてのゴスペルサークルの中心的学生運営メンバーとして、おもに賛美の使命分野で活動をしていました。そして2004年3月、家族と専門家の説得を受けて摂理の問題点を認識し、摂理を脱退しました。

摂理を離れてからは、一般的なキリスト教の教義を知っておきたいと思い、紹介していただいたキリスト教の牧師さんに、週に1・2度のペースで数ヶ月間、正統なキリスト教の教義体系やその信仰活動について話を伺い学びました。また、「宗教」というものがどういうものなのか知る必要があると思い、宗教に関する知識書を数冊読み、四大宗教をはじめとした世界にある宗教とその教義や信仰活動の比較における性格・特徴を学んだり、現代の宗教や新興宗教の特徴や、またその現象における問題点について学んだりしました。また何人かの現代の哲学者、思想家、社会学者、有識者などの著書を読んだりもしました。

そのうえで現在の私は、いかなる宗教団体にも所属していませんし、特定宗教の信仰をもって生活しているわけでもありません。また、その他の社会的な思想活動にも関与していません。

今の私は、「神」という存在を肯定しているわけではありません。が、かといって無神論者のように神の存在を否定しているわけでもないのです。正直のところ、「神がいるかいないかは、わからない」というのが今の結論です。もし、そういった存在がいるのであれば、素敵なお方ならいいなあと願うところですし、もしなくても私自身で生きる意味を見だし、豊かに生きる自信があります。

私も2年間、摂理で信仰生活を送っていましたので、神様とともに生きることの素晴らしさを知っています。ですから、信仰者の方たちの思いは少なからず理解しているつもりですし、宗教や信仰活動の意義を否定するつもりはありません。今の私は信仰の内にはありませんが、人生のいつの日にかまた何かしらの信仰を持つことがあるかもしれません。また、一方では合理的・論理的に物事を考えることの大切さも知っています。

私自身は、摂理(という集団組織)の味方でもなければ、敵でもないつもりです。ただ2年ほどの間、摂理に携わった者として、摂理の動向には大きな関心があります。それは、摂理を通して出会った人たち

が今も摂理で活動しているからです。私はいつでも彼らの力になりたいと思っています。また、当時出会わなかったとしても、摂理に携わるようになった多くの人にも同じくです。それは、彼らには自分らしく豊かに人生を送ってほしいからです。そのためには、摂理の内側からの情報だけではあまりにも不十分で、もっと様々な視点からの情報に触れる必要があると思います。

この文章はそういった様々な視点の内のひとつとして知ってもらえればと思います。摂理を離れた人たちも様々で、摂理との出会いや関わり方もそれぞれ違いますが、離れた理由も多様です。摂理の問題性を示す情報に触れて離れた人もいれば、摂理での活動が合わなくて離れた人もいるでしょう。摂理に対して腹立たしく思っている人もいれば、摂理での活動はそれで良かったと考えている人もいます。摂理のこれからの動向を積極的に見守りたいと思っている人もいれば、もう摂理とは関わりたくはないと考えている人もいます。ですから私の文章が摂理を離れた全ての人たちの考えを反映することはできません。あるひとつの、摂理の外の「このような私」という視点からの考えとみていただきたいと思います。しかし、そこにも摂理をより捉える新しいヒントがあると思うのです。

私個人には、誰か他の人の人生を操作できるような力はありませんし、しようとも思いません。ある人がどのように生きるかという人生の道を選ぶ自由の権利は、その人自身にしかありません。しかし、その自由の権利には、「多角的で公正で十分な情報と冷静な判断の上で」という前提が必要だと思います。この文章が、摂理で生きるということに対して、正しい前提のもと人生選択の自由権利を再び見つめなおす機会と助力となることを願います。その上でなお摂理を選ぶということなら、私はその人の意志を尊重するつもりです。

私自身は、数年間という限られた期間に、日本摂理の関西という限られた地域を中心として活動していました。ですから、教祖国である韓国やその他の海外の活動についてはよく知りません。この文章は、2001年ごろから2004年初旬までの日本摂理（特に関西）での活動内容をもとに記すことをご理解ください。

また、私は宗教や社会といった分野に精通した専門家ではなく、ただの一学生ですので、不十分な知識で、意に沿わず間違った内容を記してしまうかもしれません。ただ、私は摂理にいた期間には、家族や知人や新入生たちに、はかりごととして意図的な嘘を話してきた苦い経験がありますので、摂理を離れてからは、特にこの問題に関しては、意図的な嘘をつかないようにしようと考えています。ですから、できる限りの信憑性ある情報と考察をもとに、この文章を記す努力をしたいと思っています。

長い前置きとなりましたが本文へ入ります。

## 内から見る、外から見る : Look from inside, from outside

摂理で活動されているメンバーのみなさんは、既に摂理を離れた人(つまり元メンバー)に出会ったことや話をしたことはありますか? また、それらの摂理を離れた人たちに対してどんな印象を抱き、どういった感情をもちますか?

私は当然、摂理を離れた今も大学に通っていますので、ほぼ毎日、誰かしら教会のメンバーに会います。顔を見かけるだけの時もありますし、挨拶をする時もありますし、ほんのたまには世間話をする時もあります。私個人の勝手な観察によるものですが、そんなとき、メンバーの人たちはだいたい大きく分けて2つのタイプの対応を見せます。

一つは、哀れみをたたえた眼差しを投げかけられます。とくに社会人メンバーの方が多いかと思います。たぶん、長い信仰生活の中で、幾人かの、または多くの、摂理を離れることになった人たちを見てきたからでしょうか。そのなかには苦しみながら摂理を離れる決断をした人がいたかもしれません。

また一方では、敵意と憎悪の念をうかがわせる対応もあります。視線があったのにブイッと顔をそらされることがあります。これはなかなかショックです。信仰歴のまだ短い若い学生メンバーが多いでしょうか。彼らは誰かが摂理を離れるという経験をまだあまりしておらず、共に近くして活動していた私が抜けたことによって、彼らの信仰心へのマイナスの影響が大きいからかもしれません。

もちろんこういったふるまいはその人の性格によるものが大きいですから、一概に信仰歴だけで大別できないものですが、そういった印象を受けることが多いということです。

私はこれらの2タイプの対応に対して理解を示すことができます。なぜなら、それらは摂理の中で私自身もそのように教わったからです。摂理では、摂理を離れた人たちはこの時代にもたらされる完全な救いを逃した者であり、再臨のキリストと神の意思に反した裁かれる者と教えます。また一方で、摂理を離れた者は、サタンに心を奪われ、再臨のキリストとこの時代の摂理を攻撃し迫害する憎むべき存在と教えます。

私自身も摂理にいた頃には、摂理を離れる人たちに対して、真理を理解できずにかわいそうな人たちだと思っていましたし、顔も合わせないようにしていました。摂理でそのように教わり、そのように思っていた経験があるので、出会ったメンバーがそのように対応することはよくわかります。理由がわかるので、私としてはそういった対応に怒りを覚えたり、敵意をもつことはありません。

このように摂理の内側から摂理の外を見たときには、摂理を離れた人たちに対して、救いを逃し裁きを受ける者やサタンに奪われ迫害する者と認識したり、キリスト教の牧師や神父たちに対して、二千年前にイエス・キリストを無知のために理解できなかった律法学者たちのように、再臨のキリストを理解できず迫害する者と認識しています。

しかし、そのような認識は果たして当たっているのでしょうか?

摂理を離れた人たちは当然、新たな生活を豊かなものにしようと精一杯それぞれ頑張っています。その新しい生活の大部分を摂理の妨害のためにつぎ込むことは、正直無理が多いでしょう。多くの人は普段、摂理のことなど気にせず、それぞれの生活を送っているのです。摂理の動向に対して積極的に見守ろうという人たちも、自分たちの生活での余裕となる部分を利用しているのです。

教主国である韓国ではアンチ摂理の団体が組織されているようです (どのような活動をしているかは私は知らない)が、日本にはそのようなアンチ摂理の団体はありません。あるのは、摂理を離れた人たちの連絡と相談 (脱会相談もしている)のためのインターネットサイトです。ここでの多くの方は、摂理の内に居ては知ることのできない情報や問題点について、多くの現役メンバーや新入生たちに知ってもらいたいと考えて、アピールしたり相談に乗っているのです。また、過去に共に活動したメンバーたちがいつも健康で幸せであることを願い、心の隔たりなく再び会うことができることを望んでいるのです。本気で摂理を破壊しようと日々熱心に活動している日本の元メンバーなどいるのでしょうか。

また、キリスト教の牧師や信者の方たちについてですが、正直のところ、ほとんどの人たちが摂理の存在すら知らないでしょう。これは世の中一般についても同じで、大多数の人たちは摂理を知らないのです。もしかすると「JMS (摂理の旧名)」と聞けば、わかる人がいるかもしれません。数年前に週刊誌で取り扱われたからです。それでもわずかの人数でしょう。

それは、社会に対して摂理が正体を明らかにせずに活動しているから当然のことです。ですから、二千年前イエス・キリストが活動していた時、イスラエル全域においてあったと聖書に記されるような社会全体の混乱や波紋は、20年の活動を経た摂理においては世界規模で見ても、全くといっていいほど起きていないのです。むしろ社会的知名度で言えば、同じ韓国発のキリスト教系異端新興宗教である統一協会の方が格段に大きいのです (社会的問題も大きいようだが)。

摂理について知っているのは、摂理の元メンバーや元新入生やその家族など直接的に摂理に関わった人たちと、現代宗教を研究し宗教に精通している専門家の方たちぐらいではないでしょうか。

確かにキリスト教は摂理を異端指定しているようです。しかし、その理由は摂理の側が考えているように、摂理の教義の次元があまりにも高度で理解できなかったり、摂理の影響力があまりにも大きくてキリスト教が飲み込まれてしまう恐れがあるからではなさそうです。ちなみに、摂理で教えられている「三分説論」や「比喩による聖書解釈の方法」や「エデンの園でのサタンとエバの淫行による墮落論」などといった教義は二千年近くに及ぶキリスト教発展の歴史の中で既に生まれ存在していたものです。キリスト教の教会の主流は二分説論ですが、三分説論を主張しているところもあるそうです。また、比喩などによる非科学的奇跡を否定する合理的聖書解釈は自由主義 (リベラル)神学として19世紀後半から20世紀初頭にかけてドイツなどを中心に栄えましたが、信仰が骨抜きとなっていると福音派からは見られています。18世紀にはスウェーデンボルグという宗教家が霊界探訪や神秘思想といった霊的体験を主張し、その流れは20世紀に再臨思想の高まっていた韓国に入り、神秘神霊主義 (混淫派)という流派を生み出します。この神秘神霊主義教団の核心的思想がサタンとエバの淫行による墮落説です。摂理の教義の大部分はすでに歴史上存在しており、キリスト教側が理解できないものではないようです (文化や思想というものは歴史の積み重ねでできているものだから、ここでの議論はそれら教義の良し悪しについてではなく、過去にもあったという実証についてである)。また、前述のように、摂理の伝道におけるキリスト教への影響力はほとんどないのです。

ではなぜキリスト教は摂理を異端指定しているのかと考えると、キリスト教の考える異端の枠組みに摂

理が当てはまっているから、正確には、キリスト教の考える正統の枠組みから外れながらもキリスト教かのように振舞っているからということではないでしょうか。摂理における異端の概念は「1、神様とキリストを否定する」「2、キリストが肉体を取ってこられるのを否定する」というふたつです。逆にこの反対の内容を満たすものは摂理にとって正統だということです。比較的アバウトな表現に思えます。しかし当然ながら、この内容はキリスト教が言う異端の概念とはちがいます。

キリスト教の核心的教義は、「父・子・聖霊、三位一体の神を崇める」ことや「十字架にかかり亡くなり復活したイエス・キリストを信じることで救われる」といったことだそうです。キリスト教には様々な教派があり、それぞれ細部においては主張の違うところがありますが、核心的教義においては一致しているのです。あえて大ざっぱな表現をしてしまうと、核心的教義を周到しているなら正統なキリスト教の枠組みの内にあるのです。摂理の教義では、三位一体は意識方向の上での一致であって別の存在であることを主張していて、特に神を男性体、聖霊は女性体と分離しています。キリスト教では、父なる神・人の形を取られた神イエスキリストもうひとりの助け主である聖霊はそれぞれ表される形態は違いますが同一存在であって、ましてや聖霊は女性体ではないのです。また、摂理ではイエス・キリストはその救世主の使命としては失敗し(少なくとも達成ではない)、そのため再臨のキリストが現れると主張しています。キリスト教では、十字架という贖いとして亡くなったイエスが復活する奇跡にこそ救済の意味を持つのです。このように摂理の教義は、キリスト教の核心的教義とは大きく異なっています(私はどちらの聖書解釈が正しいのかということは問題にはしない)。摂理は、キリスト教がこれをもってキリスト教と名乗るという正統な枠組みからは外れているのです。しかし、摂理はクリスチャンであるかのように振舞っています。摂理では新入生に対して、指導者や講師やメンバーを証する際に、クリスチャンであると伝えていますが、また、ある情報によれば韓国での摂理の登録名称は「国際クリスチャン連合」だそうです。

ある団体にとって、自分たちの考えとは大きく違う考えが自分たちの名を語り、広まっていくことを防ごうとするのは当然のことだと思います。キリスト教は摂理を攻撃するために異端指定しているわけではなく、自分たちの正統性と権利を守るために行なっているのでしょう。仏教やイスラム教といったキリスト教を名乗らない異なる教義に対して、キリスト教が異端指定したりするのでしょうか。現に、聖書の言葉を引用しているキリスト教ではない宗教団体も多いのです。

また、もう一つキリスト教の牧師の方たちが危惧しているのは、十分に宗教に対する知識のない若者を中心とした人たちが、破壊的カルト宗教と呼ばれる本来の目的を明らかにせずに勧誘し信者にする新興宗教団体によって、彼らの信教の自由が奪われているという現象に対してです。(カルトとは、本来は儀礼、崇拜、熱狂などの意味をも言葉で、何らかの強固な信念、思想を共有し、その信念に基づいた行動を熱狂的に実践するように組織化された集団のことを指す。その中で特に、真の活動目的を隠し、自らの利益追求のためにあからさまに欺瞞を行う反社会的な集団のことを「破壊的カルト」と呼ぶ。)

摂理がどれだけスポーツや文化活動をして健康的で、メンバーが生き生きと喜んで生活していたとしても、背後にある宗教団体の存在を明らかにしないサークルでの伝道活動をしているので、破壊的カルトとして取り扱われているのです。サークルに参加する新入生たちには、どのようなサークルに参加するのを選ぶためにその団体についての十分な情報をあらかじめ得る権利がありますし、バイブルスタディーを学ぶ新入生にもどのような思想を持つかを選ぶために、その団体についての十分な情報をあらか

じめ得る権利があるのです。残念ながら、摂理の手法は彼らの選択の自由や信教の自由を侵してしまっているのではないのでしょうか。牧師や宗教の専門家の方たちは、人々の信教の自由を守る目的で、摂理を含むいくつかの新興宗教団体の活動を問題視しているのです。

このようにして考えると、摂理の内側から見える外側と、実際の摂理の外側には大きく違っているようです。どうしてこんなにも認識に差があるのでしょうか？

## 自分とよく似た他者 : Others like myself

突然ですが、「統一協会」って知っていますか？

統一協会とは正式名称「世界基督教統一神霊協会」という、1954年に韓国で創設された宗教団体です。教祖は1920年、朝鮮半島生まれの文鮮明という男性です。聖書をもとに統一協会が作った「原理講論」という教義体系を記した文章を教典としています。正統なキリスト教からは異端指定されています。韓国、日本、アメリカを中心に世界中に多くの信者が活動しています（自称、世界137ヶ国で300万人、日本で47万人。ある外部研究者による推測では、日本で数万人、韓国で5000人、アメリカで2000人、ヨーロッパ全体で1000人という信者数）。日本では90年代に桜田淳子や山崎浩子といった有名芸能人の入信や「合同結婚式」でマスコミの話題となり社会的に広く知られるようになりました。合同結婚式というのは、統一協会の教義上、完全に罪を超越した教祖文鮮明氏によって信者の結婚のペアが決められ、数百組もの新郎新婦が教祖のもと、大々的に結婚式をあげるというものです。「血分け」といって聖血を持つ教祖が女性信者に対して性行為を行うことで、「穢れた血」を抜き取り「清い血」に換えるという儀式にもとづいているそうです。

統一協会が指摘される社会的問題にはまず、「靈感商法」による資金集めがあります。信者の不幸を先祖の因縁のせいとし、壺や多宝塔や印鑑などを高額で売りつけるものです。また、修練会として数百万もの高額や全財産の献金を要求します。そして、信者は住宅地をまわり造花やタオルなどを売って教団資金を集める「マイクロ隊」と呼ばれる厳しい奉仕活動を長期間にわたり課せられます。これらのことから、あちらこちらの被害を訴える元信者たちに法的訴訟を起こされていて、日本で大きなものは90年代後半からの一連の「青春を返せ裁判」と呼ばれるものです。このときの判決では、元信者らの献金・物品の被害だけでなく精神的損害も認められ、教団は損害賠償を求められています。

また、教祖である文鮮明氏には、韓国で「淫淫」による社会秩序混乱の容疑で韓国の保安所に三ヶ月の収容、韓国で実業家の人妻との「強制結婚」で懲役刑の実刑、アメリカで脱税により懲役1年6ヶ月の実刑判決を受け服役という経歴があるという情報です。

ですが、現役信者たちにとってこれらの活動はこの世界に彼らの考える理想世界を実現するための必要で有意義な任務だと考えていますし、教祖文鮮明氏は、聖書が予言した再臨のキリストであると信じ崇めています。社会的に取りざたされている教団や教祖の問題は、神によって選ばれた教団の活動を理解できず反対し迫害する者たちのでっちあげの情報によるものであると考えています。

ここでいくつかの質問をしたいと思います。

こういった情報を知った上で今、あなたは統一協会に入りたいと思いますか？

また、もしあなたの家族や友人が統一協会に信仰を持ち、活動しているとしたら、あなたはその人の選択に対して容認してあげますか？それとも、止めさせたいと思い、説得した策を講じますか？

そして、もし、摂理に伝道される以前に、こういった情報を知った上で統一協会から勧誘を受けたのであれば、その当時のあなたはどうしますか？

もしかすると、私たちは摂理のメンバーではなく統一協会のメンバーになっていたかもしれません。なぜなら、統一協会は日本の多くの大学に「原理研究会 (CARP)」と呼ばれる学生メンバーの組織があり

彼らは統一協会や宗教団体であるという正体を明かさずに伝道活動しているからです。

私が通う大学でも彼らが伝道しているのをよく見かけますが、彼らはインターカレッジサークルの雑誌のためのアンケートと称して、学生に声をかけるそうです。スポーツやイベントを通してより豊かな人間関係を築き、また、ボランティアとして社会的な知識や教養をレクチャーしているなど謳うこのサークルに、勧誘対象者の学生が興味関心を示すと、サークルボックスへ遊びに来るように誘われます。実は、勧誘対象者が案内されるのはサークルボックスではなく、「ビデオセンター」と呼ばれる統一協会の施設です。ここで勧誘対象者は大いに歓待を受けます。統一協会のメンバーたちは明るく闊達で礼儀正しく人たちが多くいます。メンバーたちとの楽しい会話や食事やゲームなどの遊びとともに、講義を受けます。これは「原理講論」の序論です。そして、勧誘対象者はできる限り頻繁にこのサークルボックスに訪問するように求められ、また、「2 days」と呼ばれる2日間の合宿研修の参加を強く勧められます。週末に行われる「2 days」の合宿では、集団行動の中で、レクリエーションや食事をスタッフメンバーたちとともにし、原理講論の講義をさらに学びます。「2 days」の後には「6 days」の合宿があり、その後には「新人研修会」が待っています。「6 days」では、統一協会と教祖文鮮明氏の存在を知らされ、「2 days」の内容に加えて、復活論や再臨論といった核心の講義を受け、文鮮明氏がメシヤになるまでの路程を学び、祈禱・聖書拝読・原理講論拝読・水行・断食など「蕩滅条件」を、信仰を高めるために行なます。「新人研修会」では、マイクロ隊としての活動が始まるそうです。その後は寮での信者たちとの共同生活を求められ、統一協会信者としての生活が始まります。

私たちが統一協会についての情報をあまり持たず、声をかけられたその人と紹介するサークルやその仲間たちに良い印象を抱き、聖書を学ぶことに興味がある、または抵抗がなかったのなら、私たちは統一協会のメンバーになっていたかもしれません。また、もしかすると、あなたを統一協会へと導いたのは、突然声をかけてきた見知らぬ人ではなく、あなたの家族や友人や知人かもしれません。

あなたは統一協会について何も知らずとも、統一協会を選ばずに摂理を選んでいただけでしょうか？

今度はあなたが仮に統一協会のメンバーだったとして考えてみてください。あなたはこんな情報を耳にします。

「摂理」という名前の韓国発のキリスト教系異端の新興宗教がある。教祖は韓国人の鄭明析という男性で、彼は3年間、統一協会で講師として活動し、その直後の1978年から統一協会を離れ布教活動を始め、1982年に「摂理 (JMS)」を創設している。「バイブルスタディー (30講論)」と呼ばれるその教義の内容は統一協会の「原理講論」に非常によく類似しており、合同結婚式も行なわれている。信者たちは彼を再臨のキリストであると信じ、自分たちが神に選ばれ新時代を築くのだと考えている。教祖には女性信者に対するセックススキャンダルの情報があり、裁判を起こされ海外逃亡中だと言われる。日本全国の主要な大学に信者おり、正体を明かさず、サークルを通じて伝道活動している。

こういった情報を聞いて、統一協会のメンバーであるあなたは摂理に対してどう思うでしょうか？

先ほど統一協会についてしたいいくつかの質問について、摂理に置き換えて問い直してみてください。統一協会に伝道される前に、摂理に勧誘されたら摂理に入っていたと考えるでしょうか？

このことについてはしっかりと考える必要があると思います。

摂理と統一協会は別の団体です。しかし、ふたつはよく似ています。どちらにも自らが再臨のキリストだと主張する教祖がいます。当然、彼らはそれぞれ自分の教えが正しいことを主張し、他の自称メシヤは偽者であると言います。それぞれの信者の大半は熱心に教義を信じ、やりがいを感じながら活動しています。また、両方とも正体を明かさずに伝道活動をしています。そして偶然ではなく、自分たちは神によって選ばれてこの集団で信仰を持ったと考えています。

私たちは、統一協会ではなくて摂理に入れてよかったと思えるでしょうか？統一協会の信者は摂理ではなく統一協会でもよかったと考えているかもしれません。彼らは摂理の価値を何も知らない愚か者でしょうか？

自称再臨主や自称救世主がいるのは、決して摂理と統一協会だけではありません。世界にはそういった人が簡単には数え切れぬほどいるのです。彼らもまたそれぞれに自分が本物で、他は偽者だと主張しますし、彼らの教えに従えば確かに彼らが救世主になるのです。

また、宗教団体としての正体を明かさずに信者勧誘活動をしている団体も多くあるでしょう。もしかすると、私たちは摂理でも統一協会でもなく、全く見知らぬ宗教団体に入っていたかもしれないのです。20世紀以降、日本でも新興宗教、新新宗教と呼ばれる宗教団体が実にたくさん生まれ、また海外からたくさんやってきました。今は第3次宗教ブームと呼ばれる程です。近年では宗教という形ではなく、「自己啓発」を謳ったカルト団体もあります。日本にあるそういった団体のうち、どれだけのものを私たちは認識しているでしょうか。私たちはたまたま「摂理」というところだったのではないのでしょうか？

だからこそ、摂理について、また摂理の外の世界についてよく知り、考える必要があるのです。

なぜ、統一協会を引き合いに出したのかというと、人間が自分のアイデンティティーを傷つけることは困難なことだからです。生物はみな、その生命存在を維持しようと最大限の努力をします。ですから、自分の存在や生命を害するような事物を、意識・無意識関わらず避けて防ごうとします。脳を発達させて高度な知能を持つようになった人間においては、精神活動においても同じです。それは、自我、アイデンティティー（自分が自分であること）と呼ばれるものについてです。自分の存在、またそれを構成する価値観、世界観、信仰観、行動規範、所属集団などを否定する・されることは誰にとっても大きな苦痛と抵抗をもたらします。摂理のメンバーが自我を強く構成する摂理自体に対して、直接自らその正当性を問い直すというのはとても難しいことです。摂理のメンバーが外部からの摂理の実態や「先生」のスキャンダルの情報を聞くと、それらの情報は偽りや迫害だと言って、自分のアイデンティティーが攻撃されるのを回避しようとして耳をかさないのは当然のことです。でも、それでは冷静に客観的に現実に向き合うことができなくなります。

しかし、他者に対しては冷静に判断し、否定することもできます。自分のアイデンティティーは傷つかないからです。統一協会は摂理から見て他者です。他者ですが、「自分とよく似た他者」です。

この「自分とよく似た他者」の問題を考えることで、自分について冷静に判断できます。

摂理のメンバーにしてみると、統一協会はダメで摂理はオーケーと思いたいところですが、それはあまりにも合理性がありません。よく似た他者である統一協会を知ること、摂理自身の在り方にまっすぐに

向き合う勇気と必要性を知ることができるでしょう。

そして、先にした「あなたの家族や友人が統一協会に入っていたらどうするか？」という質問に対して、止めさせるために説得などの策を講じるとあなたが考えるのであれば、あなたの家族や友人があなたが摂理に入っていることを知ったときに、あなたに対してどのように思い、あなたのためにどのように行動するのかをあなたは冷静に理解することができるでしょう。

## 無知の知と唯一絶対価値観 : Knowledge of ignorance, Very best sense of value

私が摂理を離れてから学んだことうちの大きな一つは「無知の知」についてです。無知の知とは「自分が、世界の全てをは知りえない存在であることを知ること」と言えばよいでしょうか。つまり自らの無知に気がつくことです。哲学 (philosophy 愛知) の第一歩は無知の知だとも言われます。知恵を愛することにおいて、「自分は知っているんだ」という固定観念はそれ以上の発展を妨げるからでしょうか。

無知」については摂理でもバイブルスタディーの「無知の中の相克世界」の講義で学びます。旧約聖書の登場人物、南ユダの王ヨシアは、北の強国カルケシを討ちに来た大国エジプトの王ネコの真意(ひいては神の御心)を悟ることができなくて、戦に挑み無残にも戦死したと解釈します。このエピソードより、無知であることは死をもたらすことで、無知をなくさなければならぬと教えます。もちろんこれは、無知をなくすためには、真理である摂理の教義バイブルスタディーをしっかりと学ばなければならないということの主張です。

確かに私は摂理に入ること、それまでは否定していた神という存在について知り、信仰のもつ豊かな力について知り、自分が以前は無知であったことについても知りました。しかし、摂理を離れてなお自分が無知であったことに気づかされたのです。摂理の外の世界にも実にたくさんの宗教や思想や価値観が存在することをあらためて知らされ、それらの一つひとつについてよくは知らないことを知りました。また自分が所属していた摂理のことでさえ、多くのことを知らなかったことを知りました。自分はなお無知であったと知ったのです。

摂理の外、この世界には幾千もの宗教が存在しています。キリスト教や仏教といった四大宗教と呼ばれるものをはじめ、近代以降に生まれてきた新興宗教、さらに新しい新新宗教と呼ばれるものなど本当にたくさんあります。その特徴もさまざま、キリスト教やイスラム教のように絶対唯一神をもつ一神教のもの、仏教やヒンズー教や神道のように八百万の神がいる多神教のもの、あらゆる事物に靈魂が宿ると考えるアニミズムなどなど。また、世界中にその信仰者がいる世界宗教に分類されるものや、ある特定の部族・民族が信仰している土着宗教など、形態も活動も教義の内容も本当に多様です。

宗教だけでなく思想や主義主張を含めた価値観という枠組みまで広げるとその数はもう無数と言えます。無神論、科学至上主義、唯物論、国家主義、民族主義、アナーキズム、個人自由主義、民主主義、社会主義、共産主義、自由経済主義、学歴主義、恋愛主義などなど、などなど、社会に対して過激なものから穏健なもの、影響力の大きいものから小さいものまでいろいろです。

では、どの宗教・思想・主義主張がもっとも素晴らしい価値観なのでしょうか？

これは、なんとなく馬鹿げた質問に聞こえます。それは、この世界には「絶対なもの」はないからではないでしょうか。宗教について考えると、一神教はそれぞれの絶対唯一神による世界の主管を伝え、多神教や他の神仏の存在を人間が生みだした偶像崇拜であると捉えることが多いようですが、絶対唯一なる神という存在を仮定すること無くしては、この話は成り立ちません。また、一方で、無神論者は科学的合理性を見ないという理由で、神仏の存在を否定しますが、現在の科学にも未知なる部分は非常に多くあり、既存の科学の絶対性を仮定すること無しには、神仏の存在を完全に否定することはできないのです。ある宗教や思想が、まず自分たちの考えを構成している考えや事柄を仮定すること無しには、自分たち

の絶対的正当性を表し、他の宗教や思想を否定し排他することはできないのです。あらゆる宗教や思想はまず自分たちの考えが正しいということを前提にして成り立っているのです。ある人が他者の価値観を否定できたとしても、同様の方法でその人の価値観も否定され得るということです。

究極的な話をすると、私たちが知覚しているこの現実でさえ、実際には現実はでない可能性があると言主張する理論さえもあります。それは「桶の中の脳」理論と呼ばれるものです。私たちの脳みそは、本当は、とある科学研究所にある装置の中の溶液に浸かっている、スーパーコンピュータから伸びるコードに接続されており、私たちが現実だと知覚しているこの世界は、実はそのコンピュータから送られる電気信号を脳細胞が読み取って反応している、脳の中で作り出されたバーチャルワールドであるという状況（またはこれと同質の状況）かもしれないということです。ちなみにこの状況を完全に否定する証拠や論理はまだ見つからないそうです。この桶の中の脳理論は映画「マトリックス」の世界観のもととなっていると言われています。私たちは現実が絶対であることすら完全に肯定しえないのです（だからといって、実生活になんら影響はないのだが）。

ところで、宗教を信仰している人の動機の中で、その大半は慣習によるものだそうです。つまり、自分の生まれた家がキリスト教だからキリスト教を、生まれた民族や国がイスラム教だからイスラム教を信仰しているということです。次に多いのが折伏、つまり伝道によるものだそうです。あなたの知人や突然声をかけてきた人などが紹介したその宗教に、あなたが何かしらの良さを感じたから信仰を持ったというものです。自ら積極的に探し求め、たくさんの宗教の中から比較検討し、自分が信仰を持つべき宗教を選び出した人というのは、本当に数少ないのです。そういった人であっても、自分が知りうる範囲での限られたいくつかの宗教を比較したにすぎません。

世界のどこにありとあらゆる宗教や思想といった価値観を、人生の限られた時間の内に全てそれぞれ、その真髄まで体験し、吟味することのできる人間がいるでしょうか？せいぜい、私たちは今までの半生のなかで出会ったいくつかの価値観のうちでその時最良だと思ったものを選んでにすぎません。

つまり、唯一絶対に正しい価値観なんてないのだと思います。人類みな、それぞれ自分が納得できる自分に見合った価値観をもって生活しているにすぎません。

では、唯一絶対正しい価値はないという状況の中で、宗教にはどんな意味があるのでしょうか？

私は「宗教」とは、「人間として生きることを豊かにする」ための価値観や世界観や行動規範などといった教えと、それを共有する組織・集団だと思います。そして、そのことは誠実に真理の探究と人々の救済に向き合っている宗教団体ならばみな同じことだと思います。

たとえば、一神教であるキリスト教と多神教である仏教を比較すると、一見全く違った性質の宗教のように思えますが、根本的に両者が望み目指しているものは同じで、人々が救われ、より豊かに生きることではないでしょうか。仏教は四季の変化が豊かな東アジアの環境で生まれ、多くの神仏や生命が調和をとる性格特徴をもち、他方、キリスト教やイスラム教などの一神教は比較的厳しい気候の西アジアの環境から生まれ、力強く民を導く絶対唯一神を熱心に崇める性格特徴となったのではないのでしょうか。それぞれの宗教の表面的な相違は、それぞれの宗教が生まれ発展してきた環境や歴史的背景の違いに

よるものだと感じます。そういった宗教間の形態の相違に対して、その教えを説いた聖人たちの考えには多くの共通性を感じます。イエス・キリストやブッダが、人が豊かに生きるための教えは、「平等」と「自制」の精神だと思います。ブッダがその教え「四諦八正道」の中で説いたことは、人生の苦しきは欲望が原因であり、愛欲をコントロールすることであり、そのために正しく物事を見て、考え、行なうことです。イエス・キリストもまた「天にいます神を愛し、隣人を愛しなさい」と教え、「着る物や食べる物で日々、惑うな」と自らの欲望をコントロールすることを説きます。そこにあるのは、利己的に生きるのではなく、他者をよく尊重する生き方ではないでしょうか。

摂理もまた、聖書とイエス・キリストの教えを周到しているようですので、こういったエッセンスを多分に有しているのだと思います。バイブルスタディーの「カインの性格」で挙げられる54項目（序論はさておき）は、一つひとつを見ると自分に当てはまっているか否かという次元の程度にとどまりますが、54個全体を眺めてうかがえることは、共通して自己中心的・利己的・自欲にもとづく行動であって、正しく生きるために必要なのは、それとは反対の利他的な精神と行動であることを学びえます。私はその利他的精神と行動こそが、聖書に記され、「愛」と呼ばれるものではないのかと考えます。

もし、宗教を信じる多くの人たちが、互いの違いにばかり目を向けて、自分たちの価値観から見た相手の間違いを指摘し排他するのではなく、互いの共通性に目を留めて対話をするのであれば、実に多くの意義あることを互いに学びあえるのではないかと思います。

全ての誠実に活動している宗教には、人が豊かに生きるための働きなす共通性があると思います。そして人が豊かに生きるための力を与えるのは決して宗教に限ったことではありません。スポーツ・文化芸術・福祉・社会・経済・科学・学問などなどの誠実な活動には、人々を豊かに生かす力を有しています。そして、宗教を信仰していない人でも、愛情深く、礼儀正しく、感情豊かに、闊達で誠実に生きている人はたくさんいるのです。それらは彼らの良心にもとづくものでしょう。つまり、人が豊かに生きるための方法は、宗教か否かを問わず、人間として共通しているのではないのでしょうか。

ちなみに、ここで私が言う「豊かに生きる」とは、もちろん物質的・経済的・社会立場的に恵まれているという意味においてではなく、その人の幸・不幸といった境遇によらず、その人が人生を歩むことに対して、意欲的である、積極的である、生きがいを感じているという意味であることを記しておきます。

チベット仏教の最高指導者であるダライラマ14世は宗教やカルトについて次のように語ったそうです。

「人が幸福になるには、必ずしも宗教が必要だとは思わない。が、1つの宗教を信仰するのであれば、まずは正統に継承された教えを勉強すること。経典に書いてあるから信じるのではなく、分析的に確かめ、なぜこれが必要なのか、自分の頭でゆっくりに考えることだ。そして、土台をしっかりと築いて、段階的に進むことが大切で、いきなり密教の修行に飛びつくべきではない。ましてカルトは危険である。師についても、その人が正統な教えを正しく継承しているか確かめ、その人格を含め、あらゆる角度から十分に調査することが必要だ。信じる前に、まず研究せよ。教師然とした態度をとる者には、警戒すべきだ」

この内容は実にもっともだと思います。宗教に本当に精通している人は、宗教が持つ素晴らしさや価値を十分に認識しながらも、宗教が決して絶対ではないことを知っているのではないのでしょうか。

思想や宗教、主義主張、価値観といったもので人の価値が決まることはないと思います。その上で、人

は思想や宗教や生き方を自由に選ぶことができるのではないのでしょうか。そして、価値観は多様です。価値観とは人生をはかるものさし(指標)のようなものかもしれませんが、世界にはたくさんの単位があり、多様なはかり方があります。自分のものさしのはかり方と数値だけを参考にして、他人の数値が間違っていると主張するのは愚かな話です。それぞれの人がそれぞれのものさしを用いて自分の人生が豊かになるようにと日々はかり、努めているのです。

ですから、摂理はキリスト教に対して、信仰が眠っていて、文字通り信仰の無知な存在であると認識していますが、それは摂理の価値観から見た認識であり、キリスト教の持つ価値観の素晴らしさは摂理のものさしだけでははかれませんが、摂理のメンバーのなかでどれだけの人が実際にキリスト教の教えを直に学び、信仰生活を体験したことがあるのでしょうか。彼らクリスチャンたち(特に福音派と呼ばれる人たち)がイエス・キリストが起こした奇跡など聖書の言葉について、摂理が比喩的に科学的合理性にもとづいて解釈するのは違い、聖書の文字通りに(正確には「字義的に」)解釈するには大きな意味と意義があるのです。

銀貨をくわえた魚が釣れる、2匹の魚と5つのパンで男性だけでも5000人もの人々の空腹が満たされる、イエスの服に触れただけで病気が癒される、死んだ者がよみがえるなどの奇跡を、科学的に考えるのであれば、クリスチャンでも起こりえないと答えるでしょう。しかし、それらの奇跡や最も大いなる奇跡であるイエス・キリストが十字架にかかって亡くなった後に復活したという奇跡を「信じること」に大きな意味と人々を救う大きな力があるのです。それは科学に合わないからといって愚かなことではありません。そこには科学に合う合わないという議論の必要性はないのです。彼らがイエス・キリストの贖いと復活を信じることによる救済を受け、イエスの教えによって今も生きて働かれる主イエス・キリストと共に生活し、豊かに生きる力を得ることに意味と価値があるのです。

比喩という手法は物事の持つイメージの重ねあわせによって成り立っています。比喩による科学的合理性を持った解釈には、解釈をする者の想像や目的や意図に合わせて自由に意味を引き出すことのできる融通性が生まれます。それは時として、自分にとって都合のいいような解釈だけを生み出す危険性を持っています。キリスト教はその2000年の発展の歴史の中で、自由主義神学としてそういった科学的合理性をもった解釈を模索してもきました。確かにそれは現代人にとって、納得がしやすく受け入れやすいものでした。しかし同時に、聖書の文章は神によるものではなく、歴史の中で人間が生み出した寓話と社会的・生活的レベルの知恵とだけのもになったという批判も起こりました。もはや宗教的価値性を失ったとこの状況を危惧したキリスト教の人たちは、聖書を神の言葉として、奇跡を神のみ業として、忠実に字義的に解釈することを重要視しているのです。

この価値性は活動や教義の表層だけを見ては理解できないかもしれませんが、それは、摂理において目には見えぬ霊の存在を重要視して生活する価値性を、世の中の多くの人たちが表層だけを見ては理解できないだろうことと同じかもしれません。

また、摂理にとっては信仰が眠っているというキリスト教も、実際を見れば実に活発です。韓国の多くのキリスト教教会では早天祈禱会を熱心に行なっていることは摂理のみなさんもご存知ではないでしょうか。また、世界宣教が盛んな教派もあり、キリスト教が広まっていない遠隔地やアラブ諸国への開

拓伝道も行なわれています。日本国内でも開拓伝道は行なわれ、教会数も増えているでしょう。数年間で10倍にも信者数が増えた教会もあり 摂理がうらやむほどではないでしょうか。私が数ヶ月間教えていただいていた教会も主日礼拝参加者数200人規模の大きな教会でした(アメリカや韓国では1ヶ所で数千人、数万人もの信者を抱えるマンモス教会もあるそうで)。ここでは、ゴスペルコンサートなどのイベントを教会でひらいて地域の住民がたくさん参加していたり、英会話教室をしていたり、幼稚園をしていたりして賑わっています。

摂理に比べれば若者の割合は少ないですが、熱心な若者がたくさんいるようです。私はこの点において、「摂理」というのは近代の産物なんだなあと感じます。というのは、社会全体において、近代と呼ばれる産業革命以後から現代において、大量生産できる新素材や情報通信技術の急速な発達によって、機能主義や合理主義の世界が台頭しました。高層建築が建ち並び、自動車による高速移動ができるようになり、世界中とライブに情報交換できるようになり、世の中は便利になったように思われます。しかし、実際にその利便性を十分に享受できるのは、その発展や機能の複雑さに対応できる有能者や健常者や若者といった「優秀人間」や「平均人間」と呼ばれる人たちで、社会的弱者や身体などに障害をもった方や高齢者といった対応能力などにおいて劣る人たちにとっては、一概に便利だとは言えない状況も生まれました。この状況を省みて、近年では「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」といった弱者にとって、またはあらゆる全ての人(「総合人間」としての考え)にとっての便利さを求める価値観が生まれました。

残念ながら、今の摂理の活動は、社会的弱者や障害をもった方や高齢者にとって参加するには困難なものでしょう。彼らが摂理のみなさんが行なっている活動を同じようにするには負荷があまりにも大きすぎます。摂理が彼らを受け入れて、共に活動をなしていくことは難しく思えます。それは当然のことで、今の摂理が目指しているのは若く健康で有能な基準者の確立だからです。今の摂理の価値観は機能的で合理的なものに素早く対応できる若者たちに沿ったものではないでしょうか。一方でキリスト教は、イエス・キリストがどんな社会的にしいたげられている人たちに対しても救いの手を差し伸べたのに習って、年齢や能力や立場を問わず教えを広めようとしているようです。どちらの価値観が良いのかということ私には問う気はありませんが、それぞれの価値観と活動にしたがって、それぞれの今の状況があるのだということを考えます。

摂理は宗教の「One of them(いくつかあるうちのひとつ)」であって、「Very Best(最良)」でも「Just Only(唯一)」でもないということを知る必要があると思います。このことは本来、決して恥じることはありません。なぜなら宗教は、世界中の歴史や文明文化を力強く牽引してきたものであるし、実に多くの人々に生きる豊かさを与えてきたものだからです。全ての宗教の信仰者は自らの信仰に誇りを持つべきですし、同時に他者のそれも尊重すべきことだと思います。しかし、歴史の中で宗教には、多くの人を苦しめ哀しめてきた悲惨な暗雲がいつも取り巻いてきたことも心に留めておくべきです。

## 一色塗りの世界と平和な世界 : Monochrome world, Peaceful world

世界の大部分の人々は、世界中が平和であることをきっと望んでいるでしょう。それはキリスト教徒も仏教徒もイスラム教徒も他の宗教の信仰者もそう望んでいるでしょうし、摂理のメンバーもそう望んでいると思います。政治家にもそう望む人は多くいるでしょうし、宗教指導者もそう望んでいるのではないのでしょうか。

しかしなぜ、こんなにも多くの人々が平和を望んでいるというのに、世界中で宗教を引き金に、または名目にして戦争や内乱や抗争が後を止まず起きているのでしょうか？

私は摂理に導かれる前にも、こういった疑問を抱いていました。そしてその答えはきっと、全人類とあらゆる宗教を包括するような道徳観がまだ現れていないからだろうと考えていました。そんなところに摂理に出会ったものです。新入生のころ、次のようなエピソードがありました。お祈りを教わったばかりの私は、ある先輩メンバーから「どんなことを祈っているの？」と聞かれたので、「世界が平和でありますようにと祈っています。」と答えました。その人は驚いた顔をして「もっと自分のことについて祈ったらいいよ。」と教えてくれました。当時私は、自分の嫌な部分もありましたが、良い部分も知っていたので、ある程度自分には満足していたのです。むしろ、テレビなどで伝えられている世界の悲惨なニュースを聞いて、どうにかならないものかと思っていたのでした。摂理にいた頃の私は、自分の救いの観よりも、絶対的な世界の秩序としての真理に大きな関心があったのです。

摂理での私がそうであったように、平和を望む人たちの中には、自分たちの考えや教義や価値観が世界中に広まれば、世界に平和は訪れるだろうと考えている人たちが少なからずいるようです。でも、誰かが素晴らしいと考える価値観で世界中の人々が統一されるなら、本当に世界は平和になるのでしょうか？

想像してみてください。あなたが見ている世界が、色めがねをかけたように、あなたの好きなある色で一色塗りの世界になったとしたら、それはあなたにとって素晴らしい世界と思えるのでしょうか？

しばらくの内はそのある色の色味を、青なら青として知覚できているかもしれませんが、次第にその青という色の感覚さえも薄れてきて、ただ何かしら濃いか薄いかという知覚反応だけが残るでしょう。それはモノクロームの世界で、味気ない世界かもしれません。私たちがこの世界が、本当に素晴らしく美しいと感じるのは、様々な色彩が混在しているからではないのでしょうか。

それと同じように、たとえそれが素晴らしいと思える価値観であったとしても、それだけで世界中をベタ塗りしてしまうなら、はじめはその価値観の色味を感じていたとしても、最後にはただ濃淡という変化しか感じられない味気のない世界になってしまうかも知れません。私たちは本当にそんな世界を平和な世界として待ち望んでいるのでしょうか？

しかし、世界の多くの過激な宗教家や政治家たちは自分たちの教義や主義主張といった価値観が最も素晴らしいと考えていて、その色で世界を塗りこめようと陣取り合戦にとっても熱心なようです。そして、色と色がぶつかった箇所では、当然争いが起こります。色と色とがぶつかると汚濁、実に悲惨な広がりを見せます。世界中で起きている宗教や思想をもとにした戦争や対立による悲惨な出来事はこういった状況なのではないのでしょうか。または、誰かの意思によってそのような状況になるように操作されてい

ることかもしれません。

本当にそれぞれの色の価値を知っている画家であれば、キャンパスの上にそれぞれの色をバランスよく配置し、実に色彩豊かで美しい世界を描き出すことができると思います。本当の平和とは、多種多様で特徴豊かな価値観が互いの良さを引き立てながら共存する世界ではないかと私は思います。しかし、自分たちの価値観が絶対唯一正しく、もっとも素晴らしいと考える人がいるのであれば、そのような世界はいつまでも訪れることはないでしょう。

私はこの世界は、「同じで違うから素晴らしいんだ」と思っています。

もし私と誰かが、アメーバと人ほどに違っているとしたら、お互いの考えを理解できないでしょう。共通しているのは、どちらも生きているということぐらいでしょうか。どれだけそれぞれが素晴らしくても、お互い全く違い理解することができないのであれば、何の価値も見いだせません。しかし、私たちは同じ人間として、たとえ国籍や人種が違って、言語など何かしらの手段を通してコミュニケーションをとり、互いに理解することができます。私たちは、ある部分で共通性を持つから、お互いに価値を見いだせるのです。

また逆に、私と誰かが、その形態や性質や思考といったありとあらゆることにおいて同じなのであれば、お互いにコミュニケーションを図る必要さえありません。私の考えていることがまったくそのままその人の考えていることだし、私が持っているものは全てその人も持っていて、私が持っていないものはその人も持っていないのですから。もしかするとどちらか一方は必要ないかもしれません。しかし、この世の中に全くの同一人物はいません。たとえ一卵性双生児だとしても、違いはたくさんあるのです。お互いに違いがあり、持っているもの、持っていないものがあるので、私たちはコミュニケーションをとり、その価値を感じることができるのです。

共通性と相違性を同時に持ち合わせているからこそ、この世界はコミュニケーションをとることの価値があるのではないのでしょうか。その価値性を、宗教が違えど、思想や価値観が違えど、民族や国家が違えど、境遇や立場が違えど、世界の全ての人に見いだせるなら（むしろその違いにこそ価値性がある）、全ての人の命や生活や価値観といったものを尊重し合える世界になるのではないのでしょうか。私たちは本当のところ、このような世界を望んでいるのではないのでしょうか。

この手記の最初の項目で触れた、摂理の内側から見える外側と、実際の外側との認識の差異は、こういった事柄にその原因があるのかもしれません。

摂理では、摂理の教義が絶対唯一正しい価値観であると教えます。そのために摂理の外の人たちから学ぶ必要性はなくなります。たとえ学ぶ機会があったとしても、摂理の価値観の枠組みで受容しうる部分に限られてしまいます。摂理の外からの指摘を受け入れることも難しくなりますし、自分たちには無く、外にはある良さを素直に認めることも難しくなります。摂理の価値観で世界を統一しようと考え、当然その外にある他の価値観とは衝突します。特に、摂理を選ばずに外へと離れていった人たちの存在は、摂理の絶対唯一性を揺るがしかねません。ですから、どうしても実際の状況とは違った形で、摂理の外を認識しなければならなくなります。それは、摂理を離れた者に対しては救いを受けられず裁かれ

る者、サタンに奪われた者、迫害する者となりますし、キリスト教の牧師たちに対しては無知な者、迫害する者としての認識です。摂理が絶対唯一正しいという考えをやめない限りは、たとえ苦しくてもこの認識を改めることができないでしょう。

日本の摂理とその外との悲惨な戦争状態はいまのところありません(韓国ではアンチ摂理団体との抗争状態はあるようだが)。しかし、摂理を離れた人たちと現役メンバーとの不和やわだかまりは実に深刻な問題としてあります。それは、内と外の互いへの理解や尊重が不十分だからかもしれません。摂理のメンバーにとって、摂理を離れた人たちはついしばらく前まで共に熱心に活動していた仲間でした。でもその仲間だった人たちが摂理を離れた理由に対してさほど重要性や深刻性を感じていないのです。自分たちの価値観を選ばなかったという理由をです。本当はその大切さを感じているかもしれませんが、摂理の価値観が絶対的に正しいという理由のために、ちゃんと聞くことができないのかもしれません。これは、今まで摂理を離れた人たちに関することだけではありません。今、あなたと共に熱心に活動している仲間が、何かしらの理由で摂理を離れる可能性もあるからです。今日まで共に楽しく語っていた人が、明日には哀れみや憎悪の対象になっている。そんなことを考えられますか？そんな状況は本当には正常でしょうか？自分たちの考えだけが絶対正しいと考えているうちは、そんな悪夢から逃れられないのかもしれません。

## 問題の無い会社 : No problem company

摂理の教祖 先生」はその説教の中で、問題のない会社は発展しない」と話しました。この真意は、摂理にも問題はありますがそれを解決することで発展するということでしょう。

ただ、この言葉をより正確に言い換えるなら、問題意識のない会社(組織・集団)は発展しない」ということになるでしょう。たとえ問題が山のようにたくさんあっても、問題意識が無ければ、当然その会社は潰れてしまいます。逆に、たとえ問題がほとんど無くても問題意識があれば、ささいなことからも課題を見出し成長していくことができるでしょう。

摂理の解決すべき問題とは何でしょうか？進まない伝道でしょうか。それとも 先生」への迫害でしょうか。私はそうではないと思います。

摂理の組織としての最大の問題点は「隠蔽体質」だと私は考えます。その隠蔽体質には、「摂理の内側の情報を外側に公開しないこと」と、「摂理の外側の情報を内側に取り入れないこと」という二方向の性質があると思います。

前者「摂理の内側の情報を外側に公開しないこと」としては、サークルに参加している新入生に対して、その活動母体が摂理であることや宗教であることを知らせないことや、バイブルスタディーを聞いている新入生に対しても、一般的なキリスト教の聖書解釈とは別のものであることや、その先にサービスをはじめとした摂理での信仰生活が待っていることを知らせないことです。誰一人として宗教団体だと知って摂理のサークルに来ている新入生はいないでしょうし、誰一人として人生をかけての信仰生活が待っていることを知って、バイブルスタディーを学び始める新入生はいないのが実状だと思います。新入生はこの先にある形はわからないけれども、それは自分にとって益となる良いものだろうと信じて、従っているのではないのでしょうか。そして、その疑問をメンバーに尋ねたとしても、答えを先送りされたり本来の意図をごまかしながら答えられたりすることが往々にあるのです。

しかし、自分の人生の先に待つものを知らされていないのは新入生に限ったことではなく、メンバーも同じと言えます。たとえば、信仰歴の浅いメンバーには、教会のリーダーミーティングで何が話し合われているのか知らされることは無いでしょう。一般のメンバーが関西7教会の指導者クラスでのリーダーミーティングの内容を詳細に知ることができるでしょうか。教主国である韓国本部や 先生」の直近の内情をどれだけの数の日本のメンバーが知りえるでしょうか。それらで話し合われる内容は、信者一人ひとりの生活に非常に大きな影響を及ぼすというのに、メンバーに対してその全容が公示されることは無いのです。

摂理の新入生もメンバーもみな、今いる自分のポジションより内側のことが見えないのです。より内側の様子は次のステップに進めばさらに少しは見えるようになるでしょうが、本当の中心の様子はいつまでたっても見えないかもしれません。

また、学生のメンバーのみなさんは就職したら給料の10分の1献金が義務付けられることを知っていますか？またメンバーの結婚は、教祖またはその代理者によって結婚相手が決められ、合同結婚式を行なうことを知っていますか？年齢27歳以上、信仰歴5年以上、伝道3人以上といった条件(現在は内容が緩和されているかもしれないが)を満たしているメンバーが集まって合宿を開き、結婚相手の希望を

提出します。先生」の代理者(現在日本では丁賢芽氏)が参加者の中から結婚ペアを決めます。納得のいったペアは後日、先生」のもと(近年では配信映像のもと)合同結婚式をあげるそうです。

それらの制度が悪いものだとは言いません。納得了承の上でのことなら問題は無いでしょう。正統なキリスト教でも社会人の10分の1献金は正しい了承と手続きの上で行なわれているのです。しかし、摂理においては、事前にその内容を知らされることはほぼ無いでしょう。結婚や就職に関わることだけではありません。老後を迎えたメンバーの生活はどうなるのでしょうか。もし摂理で死んでしまったら、どのように葬儀などが執り行われるのか知っている人はいますか？私はどちらも知りません。私たちの人生においてとても重要な出来事が、摂理においては実にあやふやで、それぞれその時を迎えるまでわからないのです。

このようにして、摂理では摂理の外の世界に対してだけでなく、摂理の内側においても、より内部がより外部に対して隠蔽する体質があると思います。あらゆる段階において今後導かれる先に対してのフォームドコンセントが不十分なのです。

なぜ摂理では、サークルに参加する段階で、バイブルスタディーを学ぶ段階で、メンバーになる段階で、摂理での信仰や生活を選ぶにあたって事前に、その活動内容の全てを、または人生に大きく関わる重要な要素でさえも、知ることができないのでしょうか？

それは彼ら新入生や信仰歴の浅いメンバーが救われるための知恵であり、思いやりであり、はかりごとである。もし今、内実を知ってしまうと誤解をしてつまずき、摂理を受け入れないだろう。良いものを紹介するには順序がある。」というのが摂理の側の理由です。しかし、新入生にもメンバーにも自分が所属すべき団体や持つべき信仰や思想を選ぶ自由の権利がありますし、そのために充分で公正な情報を得る権利があるのです。

それは、真の神様の歴史を成すための、神様が示した方法だ」と摂理は主張するかもしれませんが。しかし、目的が手段を正当化してはいけません。目的が手段を正当化してしまうと、人の尊厳をも無視した行為さえも可能になってしまいます。その最たる例が、オウム真理教が起こした一連の事件ではなかったでしょうか。前述したように、摂理だけが絶対唯一正しい価値観ではありません。多くの健全な活動を行なう宗教団体はたとえ世間の風当たりが厳しくとも自分たちの正体を明らかにして、伝道活動を行なっているのです。そして、たとえ神が指示した方法だと考えるとしても、正体を隠して人々を導くという方法は、詐欺師や破壊的カルトといった社会的に「悪」だとみなされる人たちが利用している方法で、善行を望むのであれば用いるべきではないことは明らかです。

私は、誰かが良いと感じているものや信じているものを別の誰かに紹介することは素晴らしいことだと思います。また、路傍で見知らぬ人に声をかけるでの出会いにも大きな価値があると思います。しかし、あなたが良いと感じ信じている価値観が、世界中の全ての人にとっての良いものだと限りません。あなたが誰かを救い主だと信じるのは自由ですが、その人は全世界の人々にとっての救い主ではありません。

本当に、彼らは全人類のための救世主ではないのです。

統一協会の教祖である文鮮明氏は自らを再臨のメシヤだと名乗り、その証拠として新約聖書のヨハネの黙示録 7章 2節をあげています。この聖句の「日の出る方」とは極東アジアを示し、その地域のキリスト教国である韓国から、「生ける神の印を持って」救世主が現れると解釈するそうです。が、この聖句に記されているのは「もうひとりの御使」であって救世主のことではありません。

摂理の教祖である鄭明析氏もまた、自らを再臨のメシヤだと名乗り、その証拠として旧約聖書ダニエル書 12章 7節以降やイザヤ書 46章 11節をあげています。ダニエル書の箇所は「ひと時とふた時と半時」というバイブルスタディーの核心的講義で、この聖句から計算される1978年に成約時代の再臨主による福音が伝えられると解釈し、神の啓示を受けて同年6月に韓国ソウルで福音を伝え始めたのが先生、鄭明析氏であると教えます。この聖句の解釈については、私はその真偽を問題にしません、当然、正統なキリスト教の解釈とは異なっています。ともあれ、この過去の事柄に対してその事実を知っているのは当事者本人だけなので、数字を後付けしたり、捏造したり、予め計画して行動するなどの融通を利かすことができ、この解釈と出来事自体が彼のメシヤ性を示す確固たる判断材料にはならないようです。

イザヤ書の箇所は「特別比喻」の講義の中で伝えられます。「私は東から猛禽を招き、...」という神の啓示の箇所を用いて、「東」とは極東アジアの熱心なキリスト教国である韓国を指し示し、「猛禽」とは「鷲」のことで、「鳥類の王」である鷲は「メシヤ」を喩えていると教えます。つまりこの聖句は韓国から再臨主が現れることを予言していると解釈するのです。しかし、この解釈には文意の問題ではなく、論理的な無理が指摘されます。たとえば「カエル」は「両生類」であるが「両生類」は「カエル」ではないように、「小泉純一郎」は「政治家」であるが「政治家」は「小泉純一郎」ではないように、「鷲」は「猛禽」であるが、「猛禽」は「鷲」ではないのです。これは「集合」と「要素」の問題です。猛禽類にはタカやハヤブサやフクロウなど鷲以外にも多くの種類があり、この聖句からは「猛禽」を「鷲」とは特定できません。ちなみに、「猛禽」は聖書（レビ記や申命記など）では悪しき生き物として記されていて、マイナスのイメージです。「鷲」は力強いイメージで聖書に登場しますが、主を待ち望む者が力を受ける様子などを表していて、メシヤを喩えると明示されている箇所はありません。そして、旧約聖書が書かれていたとされる時代に「鷲」が鳥類の王であるという認識があったかは定かではありません。このイザヤ書の箇所の解釈は、明らかに論理的な無理のある解釈だと言えます。普通一般的に考えると、この聖句箇所から「猛禽 鷲 鳥類の王 メシヤ」という連想は難しいことです。とくに、鷲が鳥類の王だという認識は、現代においても百獣の王ライオンほどにはありません。そう言われればそう思うかなという程度のものです。しかし簡単に納得できるのは、動物・植物・その他「特別」といった一連の比喻の講義の中で、犬といえばあれ、豚といえばこれ、ブドウといえばそれ、といった具合に連想作業を繰り返すうちに、提示されたイメージを受け入れやすくなっているからかもしれません。前述のように、比喻には解釈する側の意図によって自由に意味を引き出すことのできる融通性があり、ときにそれは危険をもたらします。聖書を神の言葉として捉えるのであれば、人間側の意図が入り込まないように最善の注意が必要なのではないでしょうか。

ともあれ、文鮮明氏にしても鄭明析氏にしても、彼らが再臨主たりえるのは、それぞれが指示する聖書箇所を、彼らが再臨主であることを意図して、前提として、解釈する場合に限って成り立つのです。彼らが再臨主であるのは、そうであることを望んでいるそれぞれの信者たちや信者となることを方向づけら

れている人々にとってだけです。それ以外の一般の人々にとってそれらの解釈はあまりにも、合理性を欠いた、論理の飛躍した、無理のある、むしろ間違っていると言えるものです。誰に肩入れもせず、冷静に客観的公正にたって判断するなら、彼ら自称救世主たちは、聖書箇所解釈、とりわけ自己の証明において間違った解釈をしているのですから、聖書が予言した再臨主ではないのです（もちろん聖書は再臨主を予言していないという主張もある）。つまり、摂理の「先生」が全世界の救世主である可能性は、統一協会の教祖文鮮明氏が救世主である可能性とさほどかわらず、どこか知らない場所の見ず知らずの人が救世主である可能性と大差なく、ゼロに等しいということです。このことは彼らを侮辱することではありません。彼らも私たちと変わらず同じ人間だということです。

その上で、彼らによって救われたと考えるのは自由です。人生を大きく変える言葉を受けた、病気を癒された、絶望から引き上げられたといった体験によって誰かを自分にとっての救い主だと考えることは自由です。でも、それはあなたの個人的体験によるものであって、それを伝道しようとしている対象者や他の人にも押し付けるのは良くないことだとはっきりと知る必要があります。

摂理の伝道が進まないのは、メンバーたちの努力不足のせいではありません。隠蔽体質をはじめとした集団組織としての不健全さによるものだと思います。

人々を集めるのは信頼です。いくら商品やサービスが素晴らしい会社だとしても、その経営が不健全であれば、顧客からの信頼は得られず、会社は成長しないでしょう。近年、大手自動車メーカーや食品メーカーがその隠蔽体質によって人々の信頼を失い、あまりにも大きな経営的打撃を受けたというニュースもこのことを物語っているのではないのでしょうか。

自分が参加していたサークルが摂理という宗教だったと知らされた新入生はみなショックを受けます。それは、宗教だったということからの衝撃もあるでしょうが、もっとも彼らを傷つけるのは、あれほど尊敬し信頼していた人たちが結託し、実は本当のところを自分に隠していたという事実です。若者の多くは、宗教に入ることを望んでいないとしても、宗教を信仰している人たちに対して寛容で、決して否定的ではありません。

摂理において十分な情報開示がされていないのは、組織構造や活動内容の問題だけではなく、お金の流れに関しても不透明なのです。

メンバーに対してなぜ日々の献金の使途が明らかにされていないのでしょうか？金銭的な執着から言っているわけではありません。信仰者にとって、献金とは彼らの信仰心や活動の努力が形となって表れたものだから言っているのです。メンバーが日々積み重ねてきた努力がどういった形をなして実を結んでいるのか、詳細に明らかにされるのが望ましいでしょうし、明らかにされるべきでしょう。しかし摂理においては、一般のメンバーにはさっぱり明らかにされていないのです。彼らの努力や誠意の形が、無駄に使われていたとしても、意に沿わない形で使われていたとしても、指摘することも、改善することもできない状況です。

一般のキリスト教教会には会計役員がいますし、監査役員もいます。教会や組織運営に関する金銭的なことは、その収入・支出・将来計画について、その所属信者たちに明らかに公開されているそうです。

社会人の10分の1献金などの高額献金についても受領証明を出しているそうです。

信者一人ひとりが気持ちよく信仰生活を送るためには、こういった健全な会計制度が必要であるし、自分たちの信仰活動に健全さを求めるなら、進んで執りおこなう行為だと思うのですが。

そして、新入生が参加する行事やサークルの会計に関しては、もっとシビアに健全さを追求すべきです。なぜなら彼らは摂理という組織の構成員ではなく、外部者だからです。彼らメンバー以外の参加者に対する説明や了承の無いまま、彼らからも徴収した行事やサークルの費用の一部でも、教会や摂理の運営費用に流されるなどということは決してあってはいけなないことです。これは精神的問題ではなく、社会的問題です。

摂理に人が集まらず残らないのは、伝道の際や社会に対して正体を明らかにしておらず、組織構造や活動内容の告知、会計報告などにおいて充分には信頼を得られていないからではないでしょうか。情的な魅力や感性的な魅力を求めてきた人はともかく正しさや健全さを求めて摂理にきた人はいつしかその不充足さに気づいて離れていくのかもしれない。そして、これからもこういった隠蔽体質を改善しないうちは、摂理が目覚しく発展することは困難だろうと思います。

隠蔽体質の方向の後者「摂理の外側の情報を内側に取り入れられないこと」としては、キリスト教を「文字通り信仰」「信仰が死んでいる」と、実態を認識することなく決め付けて劣視したり、摂理を離れた人との接触を避けるように教えたり、新入生が家族や友人などの第三者の意見を聞くことを阻んだりすることです。

これによってメンバーや新入生たちは、摂理の外部からの評価や情報、他の宗教の教義や観念に触れる機会はほとんど無くなってしまいます。そして、多忙な伝道や信仰生活が、さらにその状況を悪化させています。また、仮にそのような外部情報に出会ったとしても、摂理の教義だけが絶対に正しいと思っている以上は、自分たちの考えに合っているものは肯定し、あっていないものは真理ではないとし、情報を都合のよいように取捨選択してしまうでしょう。

このようにして摂理のメンバーや新入生には、他と比較検討しながら、より良いものを選べるという十分な情報と環境はなく、摂理の側が与えるものを受け入れるしかないのだと思います。

このような摂理の隠蔽体質は、まるで閉めきった部屋に大勢の人が集まり活動しているかのように思えます。どんなに内装や設備が素晴らしい部屋だとしても、閉めきったまま活動していると、酸素濃度は落ち、一酸化炭素は増えて、意識はぼんやりし、思考能力は低下し、不健康な状態になります。状況を改善するには、窓を開けて換気をし、外の新鮮空気を取り入れなければなりません。

同じように、摂理もその内と外との情報のやりとりを遮断し、その宗教活動を外部から締め切ってしまうと、内部の空気は次第に悪化するのではないのでしょうか。息苦しくなった人は外へ飛び出すでしょうし、意識の朦朧とした人は自分で正しい思考と判断ができなくなってしまうでしょう。実に危険な状態です。これが、摂理からメンバーが離れていく一つの大きな要因でしょうし、摂理自身が抱える問題によって起こる摂理の崩壊の可能性だと思います。

改善の策は簡単です。摂理が窓を開けて換気し、外部と情報のやりとりをすればいいのです。それは、

摂理自身が社会に対してその正体と実態を明らかにすること、メンバーに対して組織構造や会計実態など内部情報を報告すること、被伝道者に対して宗教・摂理」であることを明示し、教義内容や活動内容に関して事前報告すること、摂理外部からの評価を受け入れること、被伝道者やメンバーに対して情報制限を行わないことなどです。これらは全て団体や組織として健全な姿だと思います。これにより、新入生やメンバーが十分な情報と冷静な判断のできる環境の中で、摂理を選ぶかどうかを決めることができます。健全な環境は団体としての魅力であり、実力を発揮できるものです。信者もその信仰に誇りをもって公にでき、正々堂々と伝道に励むことができるでしょう。

摂理が本当に魅力ある価値観や活動、集団であるならば、たとえそうしたとしても、むしろそうしたほうが、多くの人を集め、活気ある発展をしていくことができると思うのですが。

## 注文の多い料理店 : Many orders restaurant

『リング・フォー・コロンバイン』という映画をご存知でしょうか？

近年、アメリカ合衆国のブッシュ大統領とイラク戦争との関係について批判したドキュメンタリー映画『華氏911』で日本でも話題になった映画監督、マイケル・ムーア氏がその数年前に撮った、アメリカの銃社会の問題を提起したドキュメンタリー映画のタイトルです。

私はしばらく前に、この映画がテレビで放送されていたのを家族と見ました。この映画の情報によると銃による1年間の死亡者は、ヨーロッパなどの先進諸国でも200人以下、日本では100人以下であるのに対して、なんとアメリカでは1万人を越えるのです。各国の人口を考慮しても、これは非常に多い数です。この異常とも言える状況の原因を、数年前に起こったコロンバイン高校での銃乱射事件を中心に追求していくという内容なのですが、驚いたのが、アメリカでは近所のスーパーマーケットでも簡単に銃弾が購入できることでした。同じように銃が広く普及している隣国のカナダですが、こちらは年間の銃による死亡者は200人以下とアメリカのようではないのです。

何がアメリカ銃社会問題の原因なのか、この映画の内容の意図を汲んで考えてみますと、どうやらアメリカ国民の多くは、政治やマスコミによって強く恐怖感を抱きながら生活するように影響されているというのです。片田舎の小さな町でもテロリストの標的になっているという恐怖、殺人蜂の群が南アメリカ大陸から北上してきているという恐怖、ハロウィンで子供に配るお菓子の中に毒物が無差別に混入されているという恐怖といったものです。そして、銃などによる凶悪犯罪の犯人像は一律に、黒人の若い男性であるという情報が流され、人々は日中でも町をあるく事ができないほどに恐怖を抱いているというのです。

実際には名も知らぬような小さな町がテロリストに攻撃されたことはなく、殺人蜂の群も来ませんでしたし、ハロウィンのお菓子に毒物が混入されていた事件はアメリカの歴史上2件だけで、どちらも家族による犯行だったそうです。もちろん黒人男性の凶悪犯罪率が高いというのも偏見によるものだそうです。しかし、日々、人々の不安をあおるような情報が流されているというのです。

人々はこういった政治やマスコミなどの情報をもとに様々に策をめぐらせ、防衛手段をとっているというのです。そして、この人々の動向が大きな消費活動を生みだし、アメリカ経済を強く支えているというのです。それと同時に、人々は常に恐怖を抱き、恐怖に左右され、冷静な思考・判断や物事の解決策を探る前に、銃による安易な(だが、取り返しのつかない)手段を選んでしまっているようです。これがアメリカの銃社会問題の大きな原因だということです。

この映画の内容がどれほどの信憑性あるものかはわかりませんが、「恐怖」という要素が人々の行動に強く影響を与え、思考を支配するほどの大きな力を持っていることは事実なようです。

そして、恐怖の要素だけではなく、私たち社会に生きている人間はみな、外部からの情報に多かれ少なかれ影響を受けて生きています。全く外部からの情報がなくなってしまうと、私たちは生きていくことが困難になるでしょう。しかし、ある限度を越えて、特定の発信源からの強い意図や方向性をもった情報ばかりを受け取っていると、その人が本来持っていた思考や判断が鈍り、その意図や方向性に誘導されやすくなるようです。

この影響や作用を専門的な言葉で「マインド・コントロール」と言うそうです。「マインド・コントロール」は破壊的カルトの勧誘や構成員支配などの行為に対してよく問題にされています。

ここで、誤解のないように注釈しますと、「マインド・コントロール」と洗脳(ブレイン・ウォッシュ)は別の事柄です。「洗脳」とは、暴行や人格否定などの肉体的・精神的な虐待や極度の睡眠制限・食事制限や薬物投与などを伴う強制的な思想矯正を指します。一方で「マインド・コントロール」では、そういった非人格的な苦痛を与えることはなく与えられる情報の操作や感情の操作などによって、意図する方向へと被験者が自ら、意思選択を進めることを指します。多くの破壊的カルトにおいてマインド・コントロールは問題とされていますが、洗脳行為まで行なわれているということは一般的に無いことだと考えられます。

マインド・コントロールなどというと、普段の生活からかけ離れたカルト特有のもののように思われますが、その手法は私たちの生活の場面でも多く見られるものです。

例をあげて話しますと、たとえば、テレビでよくあるテレビショッピングの番組で商品としてワインが取り扱われていたとします。何の説明もなければただのワインに見えるわけですが、これが限定販売200本だったら、味が百年に一度の上出来だと言われ名のある品評会で賞を取っていたら、飲んでみないとその味はわからないけれども、たぶん価値があるものじゃないかと思うわけでしょう。そして、ゲストのタレントさんの誉め言葉やスタジオに集められたおばさま方の歓声とともに、買ってみようかなという気になるのでしょ。これらの情報による影響は、「希少性」や「権威性」や「社会性」といったマインド・コントロールの手法にあたるのです。その他にも、誰かに親切をもらったら、何らかの形でお返しをしなければと思うのは「返報性」ですし、自分がまず行なった行動に対して、正当性を見い出そうとするのが「一貫性」と呼ばれるものです。

このようにマインド・コントロールの手法と呼ばれるものは、私たちの生活の中で頻繁に見られますし、人生の中で選択を迫られる際に少なからず影響していると言えます。ただそれが買い物などといったことで、人生や生活に与える損害や影響があまり大きくないために、マインド・コントロールだと取りざたすほどには問題視してないことでしょう。

そしてマインド・コントロールとして問題になるのは、その手法の使用者が強い方向性や誘導力をもって、意図的な情報操作を行なっている場合ですし、人生や生活スタイルや思考体系や価値観などといった被験者にとってとても重要な事柄について影響を受けている場合です。そして、導かれたどりつ先が、被験者が情報誘導される以前から、本当に望んでいたものかどうか重要な問題です。

ところで、「注文の多い料理店」という文章をご存知でしょうか？この宮沢賢治の短編文学作品が、こういった「マインド・コントロール」というものを実に端的に言い表しているように私は思うのです。私は小学校の国語の授業で読んだ記憶があります。ネットで検索すれば、内容を紹介しているページもあるようですから、ご覧になれるといいかと思います。この作品で登場する料理店は客に対して、本来の意図を知らせず、わからせない状態で、客にとって魅力的な解釈を与えながら、料理店側の意図する方向へ選択させ、誘導していきます。これが「マインド・コントロール」です。宮沢賢治は1924年にこの作品を発表していますので、当然、「マインド・コントロール」なるものを知っていたわけではないのですが、世の中の

ある特殊な集団の性質を風刺して書かれたのではないかと感じます。そして、この作品に登場する「西洋料理店 山猫軒」と「摂理」が何ともなく似ているように私には思えるのです。

その物語では、ある山の奥地まで狩猟にやってきた二人の紳士は、道に迷い飢え乾いてしまいます。そんなときにこの料理店を見つけたのです。何か人生の道がわからず世の中の希望のなさに飢え乾いていて、摂理に出会った人も多いのではないのでしょうか。

玄関扉には「どなたさまもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。」と書いてあり、二人は喜んで入ります。摂理の教義でも神様による全人類の救いの予定を教えられます。

中に入ると廊下がつづき、こう書いてあります。「ことに肥(フト)ったお方や若いお方は、大歓迎いたします。」両方を兼ねていた二人は歓迎されていることに大喜びします。摂理にも「選り」があります。若い力、基準者、専門家が喜ばれます。摂理に来た人は神様によって選ばれた時代の先駆者だと教えられます。そして、摂理の存在と教義を知ることができるのは、摂理の側に選ばれた人だけなのです。

この料理店はたくさんの小部屋がつながっていて、たくさんの扉で区切られています。そして、先の部屋に進むたびに扉に文字が書かれていてたくさんの指示を受けます。「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください。」「お客様がた、ここで髪をきちんとして、それから髪を落としてください。」「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」「どうか帽子と外套(ガイトウ)と靴をおとり下さい。」「ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください。」「匱のなかのクリームを顔や手足にすっか塗ってください。」「..あなたの頭に瓶の中の香水をよ振りかけてください。」「どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよもみ込んでください。」と。そして、それぞれの小部屋には指示通りにできるように親切なほどに準備されています。二人は少しの疑問は持ちながらも、この料理店には偉い人が来ていてお近づきになれるかもしれないなど、肯定的な理由を考えて指示に従っていきます。それは二人が料理によって満たされることを期待しているからです。摂理でもたくさんの指示を受けました。既成時代のものや関係はひとまず置いて、御言葉と摂理での働きに時間をとりましたし、自分の考えや性格の固い部分や尖った部分は削る努力がありました。そして、乳蜜のような恵みを受け、キリストの香りを放ち、塩のような御言葉を身にしみこませるようにしました。そして、それぞれの場面でその指示や勧めを受け入れやすいように、先輩メンバーや指導者の親切で用意周到な助けがあったことを思います。そして、もっとも重要なポイントは、先のステップやステップが見えないことです。大小様々なことにおいて、その状況まで進まないにより内部やより先のことがわからない構造になっています。しかし、摂理に入った人は自分を満たすもの、特に再臨主による全人的救いを期待していますから、状況に対して肯定的に好意的にとらえることを願って、その指示や勧めに従います。幾分かの疑問があっても、先に待つものは自分にとって良いものだと思っているのではないのでしょうか。

しかし、二人は最後の扉の前で、「どうもおかしいぜ。...西洋料理店というのは、...来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。...」と、自分たちが食べられてしまうことに気づき恐れ慌てます。逃げ出そうとしますが後ろの扉は開きません。目の前の最後の扉の鍵穴からは青い目玉がのぞき、こっちへいらっしゃいと誘います。もしかすると、摂理においてもどんどん内部へと進んでいき、「どうもお

かしい。自分たちの求めていたところではない。」と気がつくまでになったときには、もう後戻りすることは難しいのかもしれませんが、それは、摂理で築いてきた情的な関係や、摂理」の中での自分の立場や責任や生活に縛られてしまって、摂理での存在を手放しては生きてはいけない状況になってしまうのだと思います。

その危機的な状況を打開したのは、狩猟の途中で死んでしまったと思っていた、連れてきた二匹の犬でした。犬は最後の扉に飛び込んで人間を食べようと待ち構えていた化け山猫を退治し、二人を助けました。奇しくも実際に私が摂理を離れるにあたって力になってくれたのは、摂理の教えでは死んだ者・犬のようなやつと言われている先に脱退した人たちでした。

二人は無事に山を降りて家路につき、この話の終わりをむかえます。しかし、恐ろしさによって二人の顔に刻まれたしわはずっととれることがなかったとあります。私は家族や旧来の友人との関係を取り戻しつつあります。私はあまり感じませんが、摂理を離れてもわだかまりや遺恨が薄れることのない方もいらっしゃるでしょう。

摂理に残っている人からは、勝手に想像して、物語に当てはめて解釈しているに過ぎないと指摘を受けるかも知れません。しかし、ここにあげた内容は、実際に摂理にいて感じるであろうし、摂理の内部でも語られている実状の部分も多いのではないのでしょうか。私にはキーワード一つひとつが当てはまることもさることながら、この文章の全体に流れる設定や背景における意図が、摂理の体質や構造と似ているように思います。

私は「摂理」が意図的にマインド・コントロールの手法を用いているかどうかは知りません。少なくとも、伝道や管理に携わっている多くの一般のメンバーは、新入生に対してマインド・コントロールの手法を用いようとは思ってもいないことは確かでしょう。しかし、摂理での新入生の伝道やメンバーも含めた管理の行為において、マインド・コントロールの手法で説明されるそれぞれ次のような影響が現れているのも確かだと思います。

摂理での伝道や管理において、新入生や後輩メンバーなど「新しい命」と呼ばれる存在に対して、しっかりと面倒を見、十分に愛を注ぐことが、当然すばらしいこととされています。「ラブ・シャワー」とも呼ばれるこの行為を受けた新入生たちは、教義や活動に違和感や問題性を覚えていたとしても指摘しにくくなりますし、サークルや行事への参加を望んでいなくても断りづらくなります。これは「返報性」の影響と見られます。

「先生」は再臨のキリストだと考えられていますし、教会の指導者たちはその「先生」の指名を受けていると聞かされますから、一般メンバーにとって彼らの言葉は、聞き手の意思以上に行動や選択を決定させる力を持つでしょう。これは「権威性」の影響と見られます。

摂理にとって今このときは、再臨のキリストが地上に降臨している歴史の時で、その使命期間は2023年までと限られていると教えられます。また、摂理のメンバーは神が選んだ時代の基準者であると教えます。これらのことに多くの人は魅力を感じるのです。このことは「希少性」の影響と言えます。

新入生には必ず管理者やメンバーが着き、つまづきにはしっかりとフォローが入ります。また、集団全

体が、「先生」や指導者の言葉や教義の実践へと向かうので、反抗や問題指摘などの反対方向への行為はしづらく、全体の雰囲気誘導されやすくなります。このことは「社会性」の影響と見られます。

教義を実践し行動することが義とされ奨励されます。新入生や若いメンバーは行事などでの体験が、そのことの意味の理解よりも先行しがちになり、自分の行動を正当化する方向での理屈付けとなるかもしれません。このことは「一貫性」の影響と見られます。

そして、摂理では、摂理を離れた者やメシヤである「先生」を信じない者や逆らう者、教義に従わない者は、サタンに信仰を奪われた、裁かれ地獄へ落ちる者であると教えます。このことはメンバーに摂理を離れることや摂理の外の存在に対する恐怖感を与え、摂理での活動や教義に不満を抱いていたとしても、公表したり摂理の外について調べたり、摂理を離れるという選択の可能性をなくしてしまいます。ある部分では、摂理に従わないことで裁かれるという恐怖感が、メンバーに強く影響し活動させているとも言えると思います。

こういった影響の度合いは人それぞれでしょう。これらのことが全ての人にとって作用しているのではないと思います。そして、愛を注ぐことや熱心に教義に従うことなど、これらは一概に悪いと考えられる行為ではなく、信仰者としてのあるべき姿と言えるものも含まれているとも言えるのです。

ですから、私は、摂理の場合でも、アメリカ社会の場合でも、マインド・コントロールの手法が悪意に満ちて用いられているとは言及しません。しかし、これらの影響は私たちの身のまわりに大なり小なり存在していることも確かだと思います。ですから、私たちはこういったこと存在や手法や影響についてよく知り、賢き消費者になる必要があるのだと思います。自分が今、どういう状況や環境にいるのか、どういう発信源からのどういう意図をもった情報を受けているのか、はっきりと知った上でその影響を加味して、自分にとって本当にどのような価値があるのかを冷静な判断をし、人生や生活にとって重要な買い物や選択をしていくべきだということです。それは、摂理にいても、アメリカにいても、どこにいても同じことでしょう。もしあなたが、「アメリカの白人の人たちがマスコミや政治の情報によって大きく左右され、自ら対話し確かめることなく黒人の人たちに恐怖と偏見を抱いているようだ」ということを聞いて、それは愚かなことだと思うのであれば、あなた自身もどこからかの情報によって操作され、自ら冷静に確かめることなく事実とは異なる恐怖や偏見を抱かされていないかをよく注意すべきだということです。

## 種と土壌と実 : Seed, Soil, and Fruit

私は、摂理の不健全な隠蔽体質が具現化したものが「先生のセックス・スキャンダル」、つまり、教祖である鄭明析氏による再臨主という立場を利用した、女性信者に対する姦淫行為の情報だと考えています。

私個人としては正直のところ、スキャンダルの情報で言われている内容が事実か否かは、はっきりとは判断できません。私はインターネットやマスコミなどのセックス・スキャンダルに関する情報を数多く読み、被害を訴える女性の方たちとも直接会って、話を伺いました。それらの情報は信憑性の高いものが多いと思いますし、その方たちも十分に信頼するにあたる人格をお持ちだと思っています。私個人としては、そういうことがあったのだらうと考えていますが、私はその出来事の当事者ではありませんので、本当にはどうだったのかということは知りえない存在です。だから、他者に対して「こういう出来事があった」とは言いません。でも、「こういう出来事があったという情報がある」とは伝えますし、そのことは特に摂理のメンバーにとって重要なことですので、自分の目と耳と心で直接その情報に触れ、話を聞き、冷静な判断を自分の頭ですべきだということは、主張します。

繰り返しますが、私は摂理の最大の問題点は「隠蔽体質」だと考えています。そして、その隠蔽体質が具現化したものが「先生のセックス・スキャンダル」だと思います。

先生」は1999年初頭、マスコミなどによりスキャンダル報道が激しくなったころ、韓国の本部ウォルミヨンドンを離れ海外に出ました。摂理の信者にとっては、「墓の期間」による海外宣教ですが、スキャンダルを追う人たちにとっては海外逃亡でした。それ以降、「墓の期間」が終わった現在も先生」は韓国には公式には帰国していないようです。ちなみに、日本にも2001年の年末以降、公式には訪れていないようです。それは彼が不法入国などの問題でパスポートを剥奪されているからだと思います。韓国に戻れば、姦淫の容疑などで長期間、裁判にかけられるでしょう。ヨーロッパを訪れた後、最近では香港や台湾に身を隠しているそうです。パスポートを持っていないとされる彼ですから、各国の警察当局に不法滞在などで拘留されるそうです。しかし、ただちに、保釈されるそうです。それは、実に高額の保釈金を支払っているからだと思います。

もし、ここまでの話が事実なら、この多額の保釈金はどこから出るのでしょうか？当然、信者から集められた献金からではないでしょうか。

摂理のメンバーのみなさんは、スキャンダルも、不法入国も不法滞在も、高額の保釈金も事実ではないと考えたいところでしょうが、そういった外部の情報に対して否定できるだけの証拠が摂理には無いのが現状です。

もし、摂理の会計状況が実に明確で、どこに出しても恥ずかしくないほどに健全になされ公開されているのであれば、献金使途の詳細が明らかになり、高額の保釈金に関する事実など無いと証明できるかもしれません。そこから、不法入国や不法滞在やパスポート剥奪といった事柄も明らかにされるでしょう。でも、現在の摂理の収入や支出の詳細を明らかにすることは、困難が多いでしょう。そのことによって、献金などの資金がメンバーみなが納得いかないうちに使われているのかどうかも明らかにされず、メンバ

一のみなさんが無実だと信じる「先生」の潔白が証明されるなら、容易い行為のように思えますが、この行為で摂理の活動の健全性が真にあらわにされるとも言えます。

また、摂理が社会に対してや伝道の際に正体を明らかにしないことで回避している最大のレッテルは、宗教であることでもキリスト教系異端であることでもなくて、「先生のセックス・スキャンダル」ではないでしょうか。宗教であることも、正統なキリスト教ではないことも、社会から厳しい振り舞いを受けるかもしれませんが、本質的には社会悪では当然ありません。しかし、セックス・スキャンダルという犯罪行為に関しては弁解の余地もなく、非常に大きなマイナスイメージを持たれます。世の中の多くの人は「摂理」の存在を知らないでしょうが、インターネットなどの情報検索で「摂理」や「JMS」を調べれば、簡単に「先生のセックス・スキャンダル」と繋がります。こんな現状では、社会に対して正体を明かすことはあまりにも不利です。しかし、本当に「先生」の無実を信じているのであれば、そんな状況であっても、むしろそんな状況の中だからこそ、社会に対して正体を明かし潔白を示していくのが、聖書にも記されているような信者のあるべき姿だと思うのですが。

でも、現在の摂理にはそれをするには困難が多いでしょう。摂理は今まで、新入生に対してもメンバーに対しても、彼らが今後経験するだろうことを隠して導いてきました。それを全てオープンにすることは、あまりにも「つまづき」が多く、摂理に人が残らないことが予想されます。本来なら、そのような試練を乗り越えてでも信仰と真理を持ち続けて残る人々が本当の「信者」なのでしょうけど、現在のような賑わいのある活動を維持するのは難しいかもしれません。

摂理のみなさんが「先生」や摂理に対する迫害として、具体的に想像されるのはやはりセックス・スキャンダルについてのことでしょう。しかし、それを払拭できないでいるのは、外部要因によるのではなく、摂理自身の組織体質にあるのだということです。自らの活動を健全化して、社会に対して事実を釈明し潔白を主張すればよいという当然のことができていないのです。

隠蔽体質があるからこそ、問題がスキャンダルとして形を成していますし、スキャンダルを釈明できないがために、隠蔽体質にならざるを得ないのです。

もし摂理が、社会に対してその正体を明らかにし、正統なキリスト教とは異なる教義であることを明らかにし、その伝道活動においても正体を示し、伝道対象者に教義や信仰活動に対して十分なインフォームドコンセントをし、メンバーに対しても十分な情報公開をし、外部からの情報や第三者との相談に意図的な封鎖を行わず、信者に所属・脱退の自由を与え、献金使途などの会計と監査を誠実にし、他宗教や他の思想などの尊厳を認め、スキャンダルに対しても自分たちの主張を公的に明らかにするのであれば、この団体のどこに問題があると言えるでしょうか。

これらのことは健全な団体であれば当然のことに思えます。このような団体なら誰もが安心して、興味を抱き、所属できうるのではないのでしょうか。果たして、摂理がこれらの項目を達成できるかどうかは、摂理という組織の本質に関わっていることです。

聖書の言葉を借りて、たとえ話をひとつしたいと思います。

土の中に蒔かれた種を、私たちは見ることはできません。その種が良い種なのか、悪い種なのかはわからないのです。実がみのればわかるかもしれませんが、良い実なのか、悪い実なのか。良い種からは良い実がみのり、悪い種からは悪い実がみのるというのが一般的な考え方でしょう。しかし、実が悪いからといって、種が悪いとは限りません。良い種でも土壌などの環境が悪かったために悪い実がみのったのかもしれませんが、悪い種ならば土壌が良くても、良い実はできないでしょうけど。

摂理にみのったのは「先生のセックス・スキャンダル」という悪い実だと思います。果たしてこれは、先生自身の問題で悪い種がそもそも原因なのか、それとも組織の隠蔽体質という悪い土壌が問題なのか。土の中の種を見ることは難しいですが、土壌の改良をすることはできるでしょう。良い土壌に変えて、良い実がみのれば、それは良い種のもと摂理は発展するでしょう。良い土壌に変えても、スキャンダルの悪い実が実り続ければ、それは種としての先生自身に問題があったということで、メンバーの一人ひとりにとっては手の施しようがないでしょう。

摂理のメンバーのみなさん、

あなたが本当に、人生をかけるほどに摂理の価値観を必要としているのであれば、ぜひ土壌の改良を行なってください。私は、摂理であろうとどこであろうと、みなさん一人ひとりが、健全の内に人生を豊かに歩まれることを望んでいます。摂理の組織や活動が改善されるのであれば、それは私にとっても喜ばしいことです。

でもその前に、よくよくその土壌や樹木を観察し調査されることをお勧めします。もし、悪い種だったなら、決して良い土壌に移し変えられることを望まないでしょうから、改良を進めようとする者をひどく傷つけるかもしれません。

そして、その他のたくさんのお木をご覧になられることもお勧めします。世界にはあなたの知らない素晴らしい価値観がきっとたくさんあると思うのです。決して、摂理だけを選ぶ必要はありませんし、一つだけが絶対的に素晴らしいのでもないのですから。

摂理を離れたからといって、そのことで裁かれたり、不幸をうけることはありません。そういった裁きや何かを受ける(と考えている)のは、摂理という価値観の内にある者だけで、それを捨ててしまえばそれらに左右されることは全くないのです。

また、摂理の価値観を離れるからといって、全て無くなるのでもありません。摂理に入る前の価値観や、摂理の中であなたが人間の本質的に経験したことが知恵や知識となってこれからも役立つでしょう。それらをもとに新たに出発するということです。それは人間関係などについても同じです。家族や旧来の友人、知人、時には新入生として出会った人たちが今まで以上に近い存在となるかもしれません。なぜなら、もう彼らに対して何かを隠し意図的な嘘をつく必要がなくなったのですから。

しかし、摂理を離れるからといって、幸せになるとは限りません。もちろん、不幸になるとも限らないことです。幸・不幸はあなた自身の考えや言動や選択に全てよるのです。ですが私は、摂理に残るからといって、幸せになるとも限らないことを言っておきます。摂理の中でも幸・不幸は結局のところ、あなた自身

の問題です。では、摂理と外の世界では何が違うのでしょうか。私が思うには、摂理では、ほとんど全てのものが与えられるということです。今週は何に留意すべきか、どんな働きをなすべきか、どの新入生の面倒をどのようにみるべきか、誰と結婚すべきか、ある行為の正当性や結果に対する原因理由などといったたいのことは用意されるでしょう。摂理の外では、どのような価値観をもつのか、どんな集団に所属するのか、何を行なうのか、何を正しいとするのかといったありとあらゆることと、それらの結果の責任が、無限大の幅をもってあなたの選択に委ねられているということです。それは、シビアですが手ごたえのある現実です。

先ほどのたとえ話の中で、良い種、良い実、悪い種、悪い実といった表現をしましたが、私は望ましい表現だとは思っていないのが本意です。何を良しとし何を悪しとするかは、本来、個人それぞれの価値観によるものだからです。

だから是非、あなた自身にとって、またこの世界の中で、摂理とは本当にはどういうものなのか、冷静に深く調べ考えてみてください。そして、あなた自身にとって本当に良いもの、求めるものとは何かをしっかりと見つめ考えてみてください。

固定観念や立場にとらわれず、自分自身の本当の姿と向き合い、物事を知れば知るほどに、この世界は広く多様で自由で素晴らしいのですから、私が摂理を離れる中で学んだことのひとつがそのことでした。

## エピローグ : Epilogue

つらつらと長きにわたり偉そうな口ぶりで書いてきたかもしれませんが、私も自分にとっての人生の価値を模索している段階にあると言えます。みなさんと同じように、大小いくつもの問題を抱えながら、人生路の歩む途中にいるのです。そして、世界の全てを知りえることはなく無知でもあり続けるのです。でも世界には知るべき素晴らしいことがまだまだたくさんあるのです。だからこそ、摂理を通して出会ったみなさん一人ひとりとも、隔たりを取り払い、再び顔を合わせ、コミュニケーションをとり、お互いの人生をより豊かなものにするために、これからも影響しあえると思っています。そのことを望み、この文章を記しました。

この先、摂理で出会った数多くの人たちと、以前のように心通わせ、世界の素晴らしさを共に喜び合える時が数多く訪れることを願い、この文章を締めくくります。

2004年11月

摂理脱退者 YANTA